國新話

卷首

洋学文庫
文庫8
C 177

萬國新話序

坤輿大矣辟諸一器而聚衆
焉者多不其然乎夫羣方
所分崎萬國所鬱盤河海
山嶽品物馮生埃圢乎亡
不周匝彷紜乎亡不密布

11 57006

其由車材樸屬而微至慎
爾而下迤以為完久者以
為利轉者直指者固抱者
式較軹撙軫轢衡輈雜錯
汁林烝交倚互持鱉會縟就
錫鑾釜和鈴又侈而九十其

儀邪即令始駕而遽御彼
將惴〻乎唯其目眩文彩
耳駭殷轔噦鏘之音是懼
奚暇能察夫三材庶物之
不失職與步驟折旋之比
節應樂中規矩哉迺是編

之故為椎輪庳言儕俗無
峻崇雖登之艱平易質樸
無眩惑聽熒之患上比諸
馬前之車奚不可乎過此
以往日閑月將則豈啻殷
畝可馳百仞可登哉其固

觀八極一瞬千萬里者亦
可以馴致也夫是為序
寛政己酉之冬
槐園　宇田川玄隨撰

淺野文庫

萬國新話序

天之巳窮也日月星辰之入焉而顯矣則其包括覆幬之巻外勿論已廼地之塊然中處亦莫止載華嶽而不重振河海而不洩哉五大洲萬有之國其將具載並持而不遺焉則其廣莫豈易知者哉是以章亥之步於夏鄒衍之談於燕或失則局或失則修均之不獲

其實漢張騫使西域足跡不能生葱嶺天竺之外元人窮河源亦至崑崙而止嗚呼地其不可知也乎獨有遠西氏之子不曠山不直地躬履廣土積年累世以致詳覈乃至其道里名號風俗物產國紀周悉歷歷可據復寫畫焉余世官瘍醫其所為聚以共者多取諸蘭舶之所產其物咸係西洋諸國所生欲詳其物性雜之良苦固漢籍之所載將何以載迹不悉若世之苟承家技循舊自安者恬然置諸不講也則勢必不得不直就西書夫既通其書論其事不知其地而可乎此余之所以有翻譯萬國圖及圖說之舉也家弟中良當時在側紀其談餘且旁及自所涉獵事相類者不圖成

編名曰紅毛雜話已刊行于世頃日書肆
来請家笋曰雜話之編實千百年未聞
有若是其奇者都人士家觀戸傳施
及四方紙貴竺之願為論其軼事再著
一編家笋則以余之因齎疚瘍造爲著
日蕃有徒曰姑舍爾而學而縱我驅而納諸
赦潦劉殺之役不能游息於茱園操觚
若昔日乃笑而謝之曰廼公近志存急救

濟為善汝勿馮婦實我哉答曰小人不達
大人之變一班僅窺輙昧全觀自貽編顯
之罪雖然平素所漸積蔚矣多文何
所不富抑不入虎穴不獲虎子直探麗
中得其曾所孫悅而去已幾刻成是
為萬國新話余取而閱之雖則一時雜
錄然於其五方萬國道異名號風俗
物產庶足以知其梗槩乎則世人小家

爭為攘臂下車亦所不恤也

寛政改元之臘月初六書於迎旭書屋閑窻

桂川甫周國瑞撰

桂川蔵書
岡橋士登

第國新話序

天地之間人物風土之異世世之所以不能盡知者其勢也
日出之後日入之後世世之所
謂天地之弘強也乎乃亦海航
之美者也氏出於此乎

○造物主の天地を化生せる。地海共合して一ツの圓躰と為す。海は地體の凹陷る所地は其凸起たる処にして。人類居り。畜獸産し。種々の草木果実を生ずること是を発育す。其地球合て四世界とす。一を亜細亞と云ひ。一を歐羅巴と云ひ。一を亞弗利加と云ふ。此三世界は古来より有名大洲にして。冗辭もまた既に久し。一を亜墨利加と云ふ。（我邦明應六年の比西洋のアメリカヘスプキロプロレンテイビなる者始て此世界を発見し故に其地を称して「アメリカ」と云ふ）これ近古開け初

代世界一統の産物を集め図絵を表す。
眼を深くして重ねて思ひ
見て博物を学ぶ者は
小冊子にして
寛政二酉仲冬

東洲　古渭出

る地なる故。西洋にて新世界と称せ。惣て四世界の方位各國に接壤ハ家兄甫周法眼釋する所の。地球圖説に詳なる故。此書中に及ぶ圖を設けず。

○此編ハ四世界に内亜細亞洲中の雜説のみに輯録せ。　日本中華ハ亞細亞中に勝地なり。甚事甚況。予ら等に待ふあるべきを及ぶ贅せず。其他朝鮮流虬等のやうに人口に繁多矣しく聞ける新ふるものハ省けり。

○書中の地名。皆明儒に釋字に用ゆ。秋字なる

ものハ國字にて書せるもの。紅毛雜話に例のめり。

○促呼。合呼。引呼の例上に同じ。

○此書ハ誠に雜書中の雜書にして一ふり書なるに似たり。書籍の底へ歩迫墨し。或日申椒堂の主人なく探り出して獨讀獨悅び。頻に小上木せんと事に成るに。予再三いなども。更に承引せず。懇切にせんとせよ。さるバ華夷通高考。長崎夜話なるの冊子に見せ。たるるるの御伽草帝

みハ。をよまるるもあぐいなれとそ。か
しのまふく諸ひやうち。

寛政改元季秋端午

萬象亭主人誌

朕原臣高

朕原臣高

萬國新話總目

巻之一 亜細亞之部

亜細亞洲の畧説
屋を車ふ駕ふ話
君長を斜武といふ
馬肉をくらふ話
父母ハ喰ふ話
葬送ス人を殺す
女國の事
天下の雲囿

天竺の服飾
王の子を立ざる話
カナノール島說
根樹の說并圖
哀樹の說并圖
安日河の事
南天竺の異
バサルの話附東方真珠
髑髏の臺附鹿角の臺
天下を戒指小論ふる話
都児格人の島說
護送軍の島說附駝の說
莫臥爾人の島說
石小化〳〵る人の話
海小橋をかゝる話
如德亜の國史
テリアカの說并切紙
死海の說
巻之二 同上
生膽酒の事

占城國の婚姻
同國の葬法
尸頭葬の說
酒を吸ふ話
金塔の中ふ九頭の蛇精怪事
真鍮の服飾
寺よ竈なし話
真蝿の至孝
同國の人澡洗の事
同國の送葬
陣毯の事
同國の産婦
兄弟交合して死る話
天獄の事
熱油紙抑ふ話
死屍の仕法
牛糞合ハぶる事
揚枝の事
婦人智恵多き話
陰莖ふ七宝紙飾ふ話

鳥葬の事
聖狩の話

巻之三 同海嶌之部

瓜哇紀傳
竹鎗の會の事
聖水の話
巴旦人日本へ漂流の始末并巴旦人の畜説
老人を救ふ話
巴旦の甲冑
同國の家伝

巻之四

象人語を解する話
桂枝を焼くの事
涅釈迦の話
人の血を浴る事
犀象と戦ふ
鷲の王の事
呂宋の地を伊西把尼亜ふ奪ひ取る話
男色を禁ずる説
丁子并西國米の説

食火鶏の説
唐泊浦の孫七漂泥へ漂着の話
毒の木の実の説
日本人説見世物ふ仕る事
焼酒仕り拓
イリンカットの人物
死人の首を五換る事
文郎馬神の風土
同地の言語
商人の呼聲ふ写る物を用ゐる話
同地婚娶の式
丁子并椰子油の價
同地年中行事
燕窩の説附黒坊汉人説切害せし話
喪ふ居者歌舞ゆる畠説
濱田兄弟智勇の事并畠
附録
地中海の内羅得嶌の湊口銅人形畠説

萬國新話總目終

萬國新話卷之一

亞細亞之部

東都　森嶋中良　編輯

○亞細亞洲の畧說

家兄甫周法眼れ譯說ふ曰。天下第一の大洲亞細亞といふ。西の方「タナイス」大乃「ドウイヌ」杜亦拏の兩大河を以て。歐羅巴と堺ひ分ちぬ。「ミッデルランセゼイ」地中海「ロデゼイ」西紅海の間に一線路ありて。此麦の海比の下ふて八拔ぬりてあるとふり亞弗利加と壞を接へ。東の方「シーナ」支那の今の清國あり

み至る。北の方「シケイ」ふ有りて。「エイスゼイ」氷海を際り。南ハ「イシデヤシスゼイ」應帝亞海み除む。幅員廣大みして人民繁盛あり。諸の藥品。香料。玉石。珠をそなへ。種々の品類沢山なる事。他の三洲に勝れり。三洲あるうちの。歐羅巴。亞弗利加。亞墨利加をつふ。亞細亞ハ人類発生の肇て生じ。聖賢首出の鄉にして。國土の開闢も以て他の諸洲みなんぢち。化の法洲ハ上古つる三洲あり。極めて有名大洲なり。其域を分て六ッとす。「ハ「ムスコビヤ」没斯箇未亞小屬し。「ハ「トルコ」度尔格みに屬し。「ハ「タッタル」韃靼小屬し。「ハ「ヒーナ」支那小屬し。「ハ「イシデヤ」應帝亞みに屬し。「ハ「ルシヤ」巴爾尔亞小屬にまた此洲に屬する海岸ること多し。其著名なるのハ「シベリ」止波里。北中海の中あり「セイロ」錫蘭。應帝亞海の中あり「スモダラ」蘇門荅剌「ジヤワ」爪哇「ボルネヲ」勃泥「セレベス」食力白私「マロロ」馬路古「バンダル」番方「ギロロ」及勒々「ロソル」呂宋等なり。吾　大日本國も。亞細亞洲中の一大勝地なり。

○屋を車みかゝる韃靼而鞋國中ハ大て城郭宮室ハ設けず。屋を車乃上みに造りて。居所をうつす。仮村とも家見の澤流ハいとく。此玉中縣邑村落を分ず。

晩遼陽のめき物を造りて。夜ハ老少男女を内ふとゝさぐり。豪ゝ絹の類畜まで新しみる
とあり。是を名づけて「ホルダス」韃靼語とゝ
いふなり。

○君長を斜武とゝ同上

同国の人甚勇を好むあまり。病を係りて没
する迄大なる辱とする。明人の説或説ハ曰。「ヨハンブラ」ア地球
土人なりとも法暴なる耐也。國俗甚の猛勇絶倫なる者をたゝて主
とし。ゝて「シヤム」といふ。即君長の

義なりと法せりとゝ。中国素なるか。蝦夷の国
人。なる類の人を指て。志やむといふ。是甚の地満
列ま接なる由なる。韃の志ゝを伝へしるべし。

○馬肉を食ふ同上

土俗なりとも馬乃肉を嗜む。乾中なる物を以
て絶品とゝ。故ま貴者ハ[illegible]さるで食料ハ
なる事にゝとゝ。

○道を行ふ

飢渇なれば。常の馬を刺血を瀝らして
是を飲む。又酒を好む。一碎なりて栄とゝ。

○父母を養ふ同上

此國中。東北の方れ土人。父母將ふ死せんとする時。則殺して是を食ふ親の恩を報ひ(で)腐屍の外ふ葬ひ。いぶせ丘隍の下ゝ埋るふ忍ぶ。去よ依りて腹中ふ葬るると。明人の說

○葬送ふ人沙殺を 得白得 又西ふの一種ふ「ヲペ匡」得白得 副國あり。其俗國王の死後輿棺て葬送を。途中にて人よ遇ふ時ハ。ちらで出ふ沙殺を。唱ひらく死して其王ふ事ふまつれと。一王の葬礼乃時。人を殺さる。乃沙ありりく

行へしとなり。

○女國 亞媽撒搦

往昔韃の西ふ當りて女國ありと。「アマサ匡」亞瑪作搦 といふ。りりとも號勇ふ。て戒を。君を。普て「ヲペ匡」厄弗俗 といふ。一つの名都沙責破ア。其地ふ廟祠を建。基址を湖中ふ築く。るサ約四十四丈。寛サ二十一丈余。内よ白石の柱。大抵一百五十七株ふ。どりて。各高サ七丈許。祠の内石像沙安置を。祠乃四面よ四つ門あり。其門毎ふ。白石をもりて造ア。る格を架て正門の前

よ義石を以て精工を盡し多る神像を建
う。此神祠の経営。二百二年余ありて成
多るとぞ宏麗奇巧かとんど思議のおよぶ
所ならず。西洋の人。天下よ七奇あるとと称せ
七奇。蛮語ふて「セイヘンヒウンドルレイキ」といふ。即七奇の義なり。又は初めと
「月ニヘルハンエ」区とつふ。虞初新志中ふ七奇器説あれども。多くは誤多
くして取ふ足ぬもの一ふ存る。其月ごと一度男子を
容してその地よ入しめ。これと交接て孕
せ。産れて男子あれバ輙ち殺せ。
今ハ他國ふ倣られて。此の名ふ存る而已
なり。明人の説家兄の澤説ふ日。古「イレデヤ」の西ふ

ふ「アマサ子」國ありて。もっぱら女國なり。今ハ亡びぬ
又南亞墨利加洲中ふ「アマサ」亜媽鑽といふ國あり。
此地よ大山ありて。其山中ふハ婦人のみ住居せ。春毎よ
他所の男子ふ招ぎて会歓をなせ。もし平日
此山中ふ迷ひ入男子ある時ハ。矢庭ふ是ふ射殺
せるとぞ。其婦人乃ち跡。亜細亞洲中の女國よ似たる
故。「アマサ」と名づけたるよしなり。「アマサ」ハ「ア
マサ子」なり。「アマサ」ハ今ハ存ぜず。是家兄澤せる
所の「コウランドトルロ」書名中の説なり。

○天下の一を囿　應帝亞

應帝亞國ハ（即天竺五印度なり）果實多し。凶年饑歲と
いへども。俗ども果實を以て食ふ故。絶て饑
渴の患なし。北地真珠玉石ならの和藥品香料を
產せず。天竺ハ亞國大半此玉ハ書る所
なり。さるによりて西岸の人稱して天下の園囿
といふ。（是の沢文あり。葉らふ吾邦の俗語ふ大坂八日市の玉中の蓋物ふ
ヒといつるとおなじ。）

○脹傍　同上

昭代叢書中ふ收むる所の外玉竹杖の項ふ。

寶髻青螺錦罽裁　云々

注ふ云。五印度の玉王ハ錦罽ふ被す髻ハ螺のごく

結び。牡の竹髮ハ下ふ垂るとあり。（葉らふ是ハ婦人の髮なるべし。婦人の衣裳ハ寵
經話ふ載る。）又明人の沢ふいへく男子ハ衣ふ紅を僅
ふ入だるの布を用て腰ふ掩ひ。女人ハ
布を。以て首ふ巻ふ是ハ漢ふとあり。（是ハ下流の者なるべし）

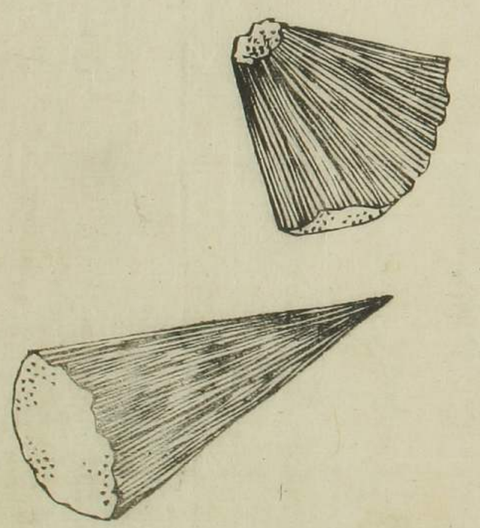
○王の子ふ立ぞ　同上

明儒沢ふ云る所の万國圖說ふいへく。印度亞玉中
乃士農工賈ハ皆その業を世ふす國王ハ父子ふ繼
ぐ。其婦妹ハ子ふ傳りて嗣とふ。王
の子ハ右ふ祿を給して自ら贍とふ。新井
先生の采覽異言ふも此沢を載られたり

○ブルートステーン　同上

印度亞國中「マラバル」麻剌機尓より屬する。「カナノール」と
いふ地より。一種の奇石を產す。紅毛語かて「ブ
ルートステール」「ブルートは血「ステイル」は石なり。「ラテイル」羅甸語ふ
多。ラテイル八西洋寺院より我しく。といふ。又產する石の名かて「カナ
ノール」ともいふ。石の質代赭石より稍堅し。
以て擊破ぐ一顆ごとに尖る形如おもに皮肉八針を
束ねるがごとくの紋あり。金瘡劒血。その他身より
血をおもとの。此石を以て搖る時八倏忽より血
止む。又刺る所の鮮血ハ。此石を削りて振かく

ブルートステーン之圖



きバ。不を隔つといへども。血脈通ずるゆゑ。此の外。万事よ舞ひ出る薬品の形状を治ハ伯氏著す所の和蘭薬選よりしるすべし。書中ふハ。

○根樹　東應帝亞

「ヨースト・インデヤ」東印度の産ふ。多く奇草奇木を産す。就中二ツの異木あり。一ツハ「アルボルデライヒ」と名ぢけ。又「ウルテルボーム」と名付く。紅毛語にて根樹といふなり。其始生の時ハ他の樹木に異なる事なし。さて長じて後。

枝の上より細條を出し。纖々として下り垂地に到れば。また根を生じ。年を経ふるに。本幹と異ならず。此樹の数かぎりなく連結して巨なる林をなす。枝葉蔭々として高天に参りる。周圍二里に及ぶ。枝毎に皆細條を出し。飄揺して地に垂れ。見るかぎり見ゆ。

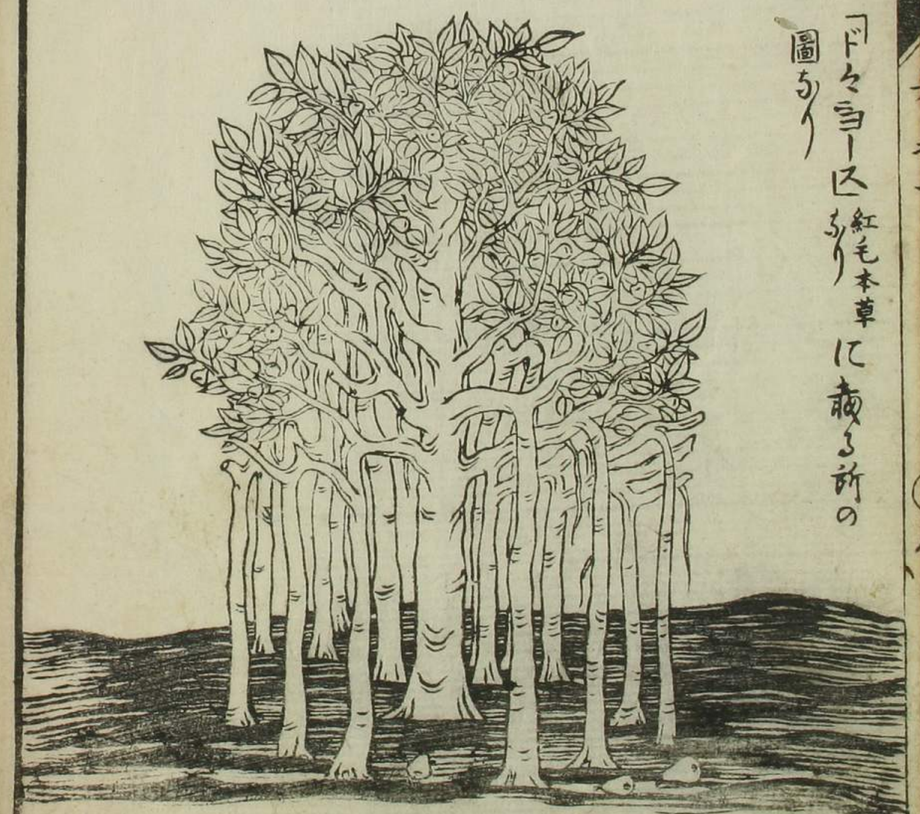
めぐ。細縄を掛るがごとし。

球島説中の説なり。伯氏これを榕樹に比す。中良案るに。榕樹画く不可。万国人物の図に。木の枝木株の生ずる所なりとして。画く物ハ。枝木を画くべし。そもそもこれ。

又云。此樹林を分ち。枝葉上よりおりひて屋宇裏なるゆゑ。國俗その下に住居することあり。大なる林

根樹之圖

「ドゝヨーロ」紅毛本草に載る所の圖なり



同弱木之圖

我後園に小樹なるものなり

哀樹之圖

「ドゥーロ」の説

小いうりてハ千佛人を坐せしむべし。其樹の中。原幹(ねぎし)よりハ枝葉ハ斬(きり)て以て佛小供を菩薩樹と名ぢくとなり。明人の説を以我家の後園(こうゑん)小に樹を植(うゑ)花咲ぢして実ハ結ぶ。そしぢめ枝より芽出しのめくるふき瘤(ぶ)を生じ。日ハ経小ちさぐひてちくくと大(イ)よるりまた亜。遂に時指の形小ぢる実となる。形無花果(いちぢく)のめくあり。色黒く紫色の斑点(ふてん)あり。味甘ぢ弱(ひらき)樹なる故枝上の両條地よりうず。

○哀樹 同上

又一ツ種の奇木あり。「アルボルデリス区」と名ぢけ又「ドローヒケボーム」と名付。蛮語ふて哀樹といふ義あり。其花昼ひらぐ。夜よりて始て開く。其樹の中ハ枯くるゆく日没て四半時ぐらゐ後卒然よ繁樹花ハ発く。艶葉ての見る不絶ぐ。其毒芬々として愛をるよ堪ふり通霄かくのゆくあり〜て咲ふいるれぐ晝く地よ落ち枝葉も亦枯委む。夜々さとあるてゆるく孤年絶ぐ。

明人の地球説ふハ法樹とあり

○安日河　同上

東應帝亞ふ大河あり。「ガンゲス」安日と名ぢく。ふ人いくらく一ト夜ふの河ふみよ浴をるハ他不の罪業ことぐく消除をと。かるゞ西名ふ五印度の人咸ふいて沐浴し。こひ祈ぐくハ罪障ハ消滅して天よ生をとうんるハ他ハ皆四元ハ中ぞるとあり。四元ハの事ハの人ハ皆四元ハ中ぞるとあり。四元ハの事ハ紅毛新話ふいへ。家兄の考に曰ハ昔陸鷲安石國ふ行いつりて。柘榴子ハ茅来る此加ふ安石榴といふといつる。安石國あるものハ即チ此の安日河ふ生ハいふるべし。安石安日音おなし。

○南印度の異

「ソイドインデヤ」南印度亞の地形三角形をなせり。其末の鋭なる所。闊さ八百里。東西相去ること百里。東の方海に臨む。西の方八霧天あり。此地をめぐること八百里。彼地の家らず。拠て彼方八大風海を吹て洪波天を散ふがごとくなる所。此方八漣漪を立てゝ平地のごとく穏なり。これ南印度亞の異とする所なり。明人の説

○バサル附東方真珠　巴尔斉亞

「バルシヤ」巴尔斉亞國より玉石。駿馬。絨緞を出せり。又好の「バサル」把雜尔○昂千熊苔なり。俗ハ馬皿。又馬猿なり。とものなり。を産せり。此物ハ「ベリアル」とゝふ獣の後よりとるなり。獣の形羊のごく鹿に似たり

此國の海中。「ヨルムス」忽魯謨「ハリラ」等の湾々を出る所の真珠を。西岸ハ東方真珠と称して殊に貴重せり。其他「バレム」「カンパ」「コルハ」等の浦々も亦多くあれども各不ハ採澤する所なり。その内「ヨルムス」より輸る玉人躶體にして腰に小さき籃を帯び海中に没すること二十尋。たゞちに海底にいたり。真珠母を拯出日中に晒

其の貝を口おのづから開くかゆゑに。珠を取ると
あり。伯氏の説

○髑髏臺　附　鹿角臺　同上

當時百尔斜亞國王一ッの臺を建。是殺ひ掠てる
不の囚々國人の頭を取て築くものあり。同々國の人
采覧異言
中に説あり。亦そうく。西洋の地名又は地名あるものと。又大小猟して一圍に鹿角
獲事三万。其の事跡を後世に伝へんがため。鹿角
を集めて臺とせり。今なほ存せりとぞ。明係説
万國史説
中の説

○天下に戒指とす　同上

都児格人之圖

紅毛縷板の万國地圖をしたがひ各國の人物を写す

都児格八世界才一の強国なり。
亦係る不。亜細亞。
亜弗利加。歐羅巴の
三大洲に
なる。
なって。亞
細亜。都
児格。歐
羅巴都
児格。亜弗
利加都児格とふ。
もと侵し奪ひとて
今は我朝やまだ。
清あり甚
恵とすとふ。所を包ふ。その沙日尼亞
等の國も皆是に属す。亦さきに
乗りたるを「スタロ」とふ。鳥の羽多イ
らるものあり。筋のたぐひにて人を指揮

護送軍之圖　同上

巴爾斜亞海中の明人の黙生丁海と称もるこの是なり。勿心魚讃斯ハ小島なりといへども。亜細亞。歐羅巴。亞弗利加の中央なり。丹ぐ沙に。三大洲の富商大賈ならぬ往来すなり。あよ百貨騈集し人烟輻輳を。海内の珍奇をもつて致しぐるれとのなりとも。貨の物なるよりいと安くもふ入れと。土人いへらく若天下の一ッの戒指ふたとへば吾勿心曷漢彭ハ戒指を。そなへくる。宝石所なるべしと自負するなり。

明人の説

○護送軍附駝之説　亜剌皮亜

「アラビヤ」亜剌皮亞國ハ「トルコ」都児格ニ屬シ國中ニ
数百里の郊原いづくか涯とも志らぬ沙漠多し。
此辺國を通流する高張まさハ如德亞國なる
馬哈默の廟へ馬哈默とつくる、西方の聖人なり。其ノ所なる教ハ中
人に。西洋にてハ「マゴメター子」とつく。此廟なるものを奉ずるを
其遺跡をなぞらんとて。如德亞國につづく人多しなり。来往する行客。
亜剌皮亞人の侵奪を恐れ黨を結んで往還に。
守護をして路次の礼妨を禦志めんる。近國よりも送
乃甲辛に出もとるなり。通商の旅人。並に警固の軍
勢。あつまりて四五万人より七八万人に及ぶものあり。
糧米行李ハこれをぐ〻を駝に負志むるもまた八九千

疋より〻ぞといふ。見送の軍兵いづれも甲冑を帯し
兵器を佩びすあるバ未塵ふるさんと。武を張り勇ハ逞志
くし。隊伍を礼さぞ押行く事。さらに行軍の形
勢ハ出るぞ。其内地理よくハ志く水草ハ在所
を知るる人ハ案内とし。我ハ知ぬ近き所ハ
野沢をたずねるを。此辺の旅行ハ。今ハ見送の
軍兵の力ハ借りあるぶれハ往還志るるなり
又亞弗利加洲の「アレキサンデリヤ」亞礼機山的里亜より。都児
格ヒ都へ。都の名を公斯富丁那波里とよんにも載せる往来の海上ハ海賊ハ行く
為の見送軍とあるなり。此見送の軍兵の事

と。紅毛人て「カラハー子」といふ。澤して渡送軍
といふ義なり。（亦見汉ちる和の「コウラード」トルコの異説なり。）　明人ハ「カラハー子」
ハ防寇と譯せり。海洋切を行ふ砲を用ゆるハ。
此獸百貫目の若の如きもの。晝夜弛て労々
るもを志るべし。其脚長きがあり。海漢に行ふ是れ
ゝ。一日ふ麦蛍子の。大サ芋魁ばかりなる如五ツ
六ツ食し。又乾草を齧ふ八十日ゝ之ふ。
一ト夜飲ず。腹中能ふ行ふ。ふまて暖地
の中水よ之しき味ハ。ゝ抜を剖て内ハ珊瑚
冷ゝて飲ふ堪ゝ。其骨肉皮毛ことゝ

く茉用ふ充。形状主治ハ和蘭茶巴延ふ詳なり。
（本艸の説ハ甚粗なり）紅毛語ふて「カメール」といふ。ゝ拍来ゝる
「テレープ」といふ。彼天鵞絨の如き毛布ハ。什獣の毛
ハ以て織ゝる物のゝ如ゝ。ゝ毛ふ。ゝ毛ふ。ゝ毛ふ
獣なり。吾邦ふて若の駄馬のかゝゝみをひき
ゝの如ゝ用ふ。「テレープ」ハ。蛮人の麻能ふ用ゆる
料ふ織物なり。ゝの人烟包。挾囊などゝ
似て打料ゝする事なり。

○莫臥爾國

明傷の説ふ曰。五印度の内。南印度のゝ古代ゝ

莫卧爾國男子之圖

此國ハ「パレンテイル」と云
紅毛書ニ載る所多シ

同婦人之圖

あて。其餘の四ツハ皆莫臥爾ふ係さらず。其のうち西印度ハ王兵五十万。馬千五百。象二百ふ有しく。莫臥爾の軍を禦ぐ。其象の脊ふ一ツの臺を負ふ。内ふ軍卒二十人ふ容る。まさに鳥統千門のうち大なるもの四門。其の大統なるものハ牛二百ふ余りつくやうにて一門ふ載せ。其ふ百万の軍實ふ出し。陳ふ列して防ぐといへども。遂ふ敵ふ対すして莫臥尔の麾下ふ降る。東ふ向しと。是ふ居らず不れ莫臥爾人の畫ハ。紅毛画の臨写なり。采賢異言ふ

小曰其人赤髪紬瞳なり。男女皆白き布を用て頭ふまとふ。衣ふ領なく窄袖なりと。世界乃内莫臥爾國の華英ふ及ぶものなしと。紅毛人のいへるよしなり。西洋ふ多く産する不の金緞花緞ハ大抵十五ふて織るものを用ゆるとぞ。我邦ふて毛織と称するものハ彼ふ出る織物ふ模て織るなり。

○石人　納多理亞

「ナトリヤ」納多理亜國ふ山あり。多く瓊ふ似たり。國人ふて名づけて鑿。ある日一ツの石穴ふ入る事ハ

巷ハ石人数かぞへるなり。是昔時死と
避くる民ありて穴居ありしが。死して後を家
よ凝やうなる化して石となりしと。明倫の説
弔先年蛮書を見し内よ大なる石窟の内に。
十字形ありて其死人数百立をあり。人物を
て其死骸がかれうなる色の画畫を見しう。
書の名とも忘れしうされ彼石人の畫なる
しや越後地國ありしが石の弘智法印も石人
の一種なるべし。

○跨海石梁　同上

那多里亞と。都児格の間海をへだてゝ。其間五
を。むかし。那多里亞王失尔塞なるもの。大
土石の功を眞。海ふ跨がる石梁を加へて友地
を通連す。後代ふなりて。風浪よ衝撃せられ其
梁頽廃せしとなり。明人の説

○如德亞の國史

明人の説よいく天下の諸国に。上古の事跡を
記する史多しといへども。たきものの八千年を記
するものも三四千年ふるべし。と史ありくらに世時あ
て訛謬多し。元と「ジューデヤ」如德亞國の史書ハ。

冠冕りして六千年来。世々の史官筆を絶ぢ。
歴代の事実茫漠を記する。委曲分明あるて
いさゝか脱漏なし。

○的里亞加　同上

如徳亜の西小國あり。達馬斯谷と云ふ。土人丸藥を製す。
甚名あり。的里亜加と名づく。能百病を治す。先
りつくれ毒を解く。此藥を試むるに先づ
毒蛇を竟めて身体を咬傷し。毒発して腫
脹時出の藥少許を嚥ぶに即愈ぶと云ふ
なり。各國にて珍異とす云々　明人の説　本草綱

目小底野迦。苦寒あり。百病中悪。客忤。
邪気。心腹痛。積聚を治すとあり。集解に蘇恭曰。
西戎より出ず。彼人いへらく。豬膽を用ひて丸れば
化すと。形千久壊の丸藥に似て赤黒色なり。桂山先生の説に曰。
華人のいふ。久壊丸藥八帝千特藥の多。彼邦八特藥
丸ものの邦のごとき特藥と云ふもの八なり。
胡人尊くたぶ
さへ。毒これ孤たる。毒これ孤たる。用試むるに効あり
と載せり。安仙丹八西庠の人。常に用ゆる所にして。
起死回生の妙藥なり。吾邦にも多く童稚に
齎来ることを覓得ることあれども。極めて
滑易にして煉薬なり。ひげ疥瘡の死ぶべきを

者ふ所をしらざる事として。功を他病に試むるもあるさいも。其船来る物と称するも。多くハ賀茂物にして真物ハまれなりといへども支を尤いひらるまでみて。志ゝと志ゝを無ぞる人もあるべき。時分ハ二十年に来。前野蘭化先生のいさわしふよりて。東都の諸子蛮書を後学するもの「ヨメイル」昏の名ふ載る所の的里亞加方を翻訳し。紅毛人「テリアカアンドロマアカ」とゆふ。ロマテリア也ともゆふ。其の上近代西客の口授を交て其薬ふ製し。志ゝく経験する事ふ備ふいたる偏是昇平の巨澤なり。的里亜加諸方の中ふ。一千種ハ「アルムテリアカ」なるものなり。「アルムテリアカ」ハ蛮語貪の義なり。是薬剤ハなるべきなり。其効ハ上好の薬品多味を調へて製し簡易なるものにして。尚蛮人の携来るものを試むるふ。大半「アルムテリアカ」なり。其巨細を弁ずる程ふなるも。さらに清豪傑蛮書を沢し。丹薬を製する事を潜する所ふ依てなり。豈愉快なるふあらんや。我邦学者製して施行ふ。其効わ〻を経験するに。前来のものとかくるなり。

りとうを諸病ふ用ゆ効あれども目のあるを
よ験をはくる不尤のめしし。
汗を発し眠泥し。疼咬頭痛ふよう。嘔吐
下利をそ。を拘隔ふさがるるとき。胸さる
ぎして元気安らざるを忘げめ。癪痛疝気。
其他りろくの痛泥和げ。食毒酒毒を解し。
痘瘡。痳疹ふりけるも功あり。始て熱気を発
病あ。邪みてときは方症の清発よるる
しあり。癲癇瘧疫癘よりし。熱のさし
引ある症あ。焼酒りそときは脊よぬるべし。疔毒。

便毒。虫ぎし等。及風犬の咬傷ふ少酒
ありを塗てよし。癰疽発背癰瘡ふ用ゆべし。
大人ハ木穂子一箇ゆどる。病ふよりてハ二箇ゆど
も抜らべし。小児ハ黒豆一粒ゆど。茶ゆも白湯
ゆる送りも。小児ハ行ゆも用てよし。

○死海　同上

同國中に一ツの海あり。其水ゆるゆる鹹く。凝結て
松脂のごく。絶く波浪を揚げ。大木大石錨の
のたぐひを投入ども沈むるふし。力を極めて
押入ども沒ゆる事ゆどる。國王かく

人を[illegible]て沈むるに。入ればもして止ず。海の日に映ぜれハ五色の文彩とおす。海中水族を生ぜるゆへ。死海と名づくとゐん。紅毛人ハ「ドーデゼイ」といふ。「ドーデ」ハ死なり「ゼイ」ハ海なり。中良案るに。此海ハ石油の一種なるべし。石脳油なる者ハ火脉ある地中ハ婦珀を生ずと。[illegible]くを溶蕩てさらものとなるゆへ。童観[illegible]少及べり。

萬國新話卷之一

萬國新話卷之二 亞細亞之部

東都　森嶌中良　編輯

○人膽酒　占城

東西洋考ふ云。むかし占城の國王。古の越裳乃地なり。秦の時林邑といひ。漢の時象林といひ。又區連敍といふ。所ありて人の膽を採。酒に入れて是を飲。通身膽のごとくなる。中良まさしく是を浴。通身膽のごとくなる。中良案ずるに。此條は。眞臘國よりおくるなり。眞臘風土記に云。毎年八月の頃。占城王人の膽千斤を索。

去れば依て去獵王。夜ごとに人を城外ゟ出し。
其来の人のれば。縄を作りて堺の外に城。
ひよおうぶつせく引き絡め。小さき刀にて右の
脚下を裂て撞城取り。数の足を俟て。占城王
憤とあり。

○婚姻　同上

此國は嫁娶ハかるうぢ八月をとりも。女の方より
男に求む同姓を嫁ることあり。東西洋考の説　北史ゟ曰。媒
者をして。金銀。釵。酒魚を齎して。女乃家に
いたる。夜おいて吉日に定め其日ふるれば
男の家ゟ親族を令して宴に役は。女の家にハ。
一人は門に立て門に戈矛の類を持て守るべし。紅毛談話乃説合也とあるべし　女を
引て男の家ゟ至る。吉日にれて婚盟をして出迎ひ。
で是に拜ると。

○葬禮　同上

隨書ゟ曰。王死れば七日。百官ハ三日。庶人ハ一日ゟ
して葬る。函の内ゟ屍を入。導從人ハ鼓を打て葬
通る。水辺ゟいたり。薪に積で屍を焚其骨王ハ
金甕。百官ハ銅甕。庶人ハ瓦甕ゟ収めて海ゟ流す
とあり。葬送の時。男女皆髮を剃て隨ひ来り。

あ道あて哀を乞し。帰る体ハ更て異ぜず。七日おとゝふ多紙焚花を供志て後死も其かゝしむる。七こ四十九日ゆゝして罷とゝん。

○戸頭蛊　同上

星槎勝覧ゆ云古城の戸頭蛊ハ婦人ゆ瞳なし。夜よりくれゝ其所花去りて人の織物を合ひ。花出ゆて後體ゆ合ゆ。ゝ其所を封ゝ固あるひハ體ゆ別震ゆ移せゝ即死も。病者糞ゆ腐色ゆ出ゆ遭ゝ妖気抜ゆ入てゆあゝゝ死を云ゝ。外國竹枝詞ゆ。

那堪黒夜遇戸蛊
注ゆ小児の糞尖ゆ含ゆと云て。此を
以下れ話説ハ此國の半ゆふあゝゝれども固ゆ記して
児を耳を咬ゝし。ゝ太平廣記ゆ云山南の浸河
乃中ゆ花頭の者あゝ。ゝゆ飛頭獠子ゝ名あゝ。ゝ花
んとゝる一日前より頭ゝ項へゝけて紅の線乃めく
ゝる筋ゝれゝ妻子知て是ゝ看守を及ゝ
状病ゝゝ忽牙を鼾て去ゝ。ゝ岸泥ゝ
まいて。蠏蝌の類を食ひ。暁ゆ將ゝして花還れゝ
ゝく美ゝ見ゝゝゝゝ其後實云ゝ又南方異物志

小云。嶺南の溪河より飛頭蛮あり。其の項に赤痕ありて翼とす。一飛て蟲を食ふ。三才圖會に云大闍婆國の中（中良案ずるに闍婆國は爪哇の古名なり。）に飛頭蛮あり。其人睡るに臨て頭を飛ばす。之を瀛涯勝覽に云。屍致魚と號る者は乃婦人なり。其目瞳なし。夜寢る時は刎て頭を飛ぐ人家に入て小兒乃穢を食ふ。気小兒の腹を侵す。必死す。（中略）夫その婦の飛て出る時は、羅家屬に及ぶとあり。（是は六朝の飛頭の事なり。風土記に出ず。）

鼠水醬を飲。飛て魚を食ふ云々吾邦にては

絡は轆轤首とも。西國にては抜首といふ。中良案ずるに。琅琊代醉に元の詩人陳孚なる者。生て安南に使する時。紀事の詩あり。

鼠飲如瓶頭飛似轆轤

けだし嘗て頭を飛ばす者を見たるか。予往年相模鎌倉に遊べる時。長谷の辺に所家に轆轤首ありと。婦人にて頭に赤き痣ありと。伝聞の流言を云おしへ。兒に祟人の知らるるべし。いうさんの条に。飛頭の事は物表捜神記にあり。此は異国の事なり。

○酒を及　同上

東西洋考に云。占城國の人。酒を甕に釀し。熟
するを俟て賓主かの甕を繞て立し。三尺ばか
りの竹筒を挿入て。次に吸盡し。未いさ
ぎて。水を注ぐ。是を吸ふに酒の味ひ尚て止
とゝ。外國竹枝詞に

三尺竹竿輪灌酒

かく詠じたる。是なり。

○金塔の中の妖精　真臘

真臘國は占臘と称し。亦東補塞ともいふ。占城の
西にして。應帝亜の属國なり。至大豪富國なる
加唐山の諸に。富貴無及真臘强といふ。竹枝詞に

とゝ詠じたり。城の周圍二十里ばかり。宮室の美。
云盡を絶たりとなり。真臘風土記に云。宮中に金塔
あり。國王貴く。其上に卧す。塔の中に九頭の蛇精
ありて。女身なり。已に土地の主なり。すなはち每夜
主と交媾す。其妻といへども。敢て入事あらざるに。二
敵の後。宮に帰りて。妻妾と同じく睡る。その妖
精ひとしく吐。國王の死期を知るといふ。

蕃主一下夜仕されぐ。たちまち災禍を獲とぞ。

○直眞服飾　同上

風土記に云國王より以下。男女いづれも椎髻して祖裼あり。布を以て擾巻囲む。中へ入る者ハ擾巻の上小一條乃大布巻しき。此布ハ等階あり。とりよ百姓ハ女子ぐらい。此大布を用ゆるもの白るを。王の用ゆるものハ直金三四両する物なり。極めて華美精美なり。遅羅占城にて織る。代用ハ西洋にて織るを上好とする。國王ハ佛に依りて金冠を戴くるあり。冠を加へざる時ハ茉莉の花乃花を採り編てにて髻を巻て。頂の上小大なる珍珠三行ぐらい巻く。足ハ裸足。華夷通商考小中に出る。貴人ハ男女とも皮履を履く。跣足なり。

と。臂小金鐲をおび。指ハ指環を金にて小檀麝を塗る。手心と御底を紅なる茅にて赤く染られまた百姓ハ女子ぐらい染る事許を。

○寺小竈無し　同上

同書小云。僧を芋姑といふ。剃髮して。黄なる衣を偏袒右肩に着し。腰小同色なる裙を纏ふ。堂ハ悉く跣足なり。毎寺ハ尾蓋にて堂ハ中に紅

の衣を穿る。釈迦の如く仏像乃仏安置し。
小泥絵仏一。飾る丹青を汰る。塔中乃仏八
鐘鼓繞鈸幢幡宝蓋
鋼を以て造るもあり。
はたぐひ絵くたり。仏八皆魚肉を如ス酒八
決して飲ず。仏も魚肉を供ず。寺中ハ厨も
竈もなし。日くも斎八時ハ斎主の家より毎ニ通
らる。和の経巻八貝葉を畳で（貝多羅樹の木の葉なり）齊整ハ仕
立ての上へ行ても也。也を巻ものや迷ふと経文紙なり。
文字八回鶻字なり。（此回ハ官府の文書より平日のちらし迄。麻の皮を漉く。ハ月の太ハ
小紙ひてさるくハ試。白堊のぬき物ハ紙を用ひて書ハ上ハ書下さず。紙ハ向てちらし）

○雪隠　同上

同書ニ云土人家毎ニ坑を堀て溷とす糞満れば是
を填まる。別ニ坑を堀。此玉田てハひさきを掘ひく。田畠ともニ糞を用ひるなり。和俗溷
ニ登て既ニ畢ル時ハ池ニ入て尻を洗ふ。也て不潔
のるまハ九の手を用ひ。右の手ハ飯を拿て喰ふ。
故ニ別ニ此地ハ張泊の唐人溷ニ乞りて紙を汲く
尻を揩拭ハ土人ハ朝夕ふと為り。中良業る
小風土記の説を閲るニ真臘人大抵ハ黒皮多り
宮人のぬきよりて。其毛
むのぬく白きものあり。紅毛雑話ニ記る烏鬼厠ニ
出て尻を洗ふ糞ニ交ニ合セるべし。又右の紙を

たゝ[illegible]ゆゑ志むし事。此辺と異なり。是ハ地方小
なりて差別あるゆゑ。又安[illegible]（其ゆゑの事ハ。さゝ[illegible]乃
なれハ。ゆゑ人のわくとなり日ゆ　多之なる地の土人なり。さゝ[illegible]ハ海有なる土地
（其なる者ハなきなり）。

○直臘人の澡洗　同上

同書ニ云土地なるゆゑ常ニ熱なるゆゑ土人日夜ニ
城浴なり。浴室盂捅の如有事なり。家ニ
池を堀り。男女いづれも裸形ニて池中ニ入。婦人ハ
左手ニて牡門を遮のこされども父母なるゆゑ
弓年人池ニ在て子女早幼ハ戯酌して敢て入
ず。子弟の池ニ在ときハ。高年の人も亦去り。或時ハ

城中の婦女三々五々として城外の河辺ニ至り。衣服を脱
布を脱去。水中ニ入て澡洗ス。踵より頂ニいたるまで
いさゝか[illegible]ゆゑ[illegible]なかれ。動ずれば共人数千況ンや
数ふべし。山内ニ府第の婦女も交ると云ふ。庶人
此地ニ旅寓する者。されを以て遊観の出ると雖
抵堵外の大河ニ日ゝ[illegible]ていまわざるなかれ
ゆゑ。河ゆゑ渦ふ[illegible]て湯の如し。唯五更の比
微ニく冷なれども日出ニなれば。又温ニなる。
土人交接の法ハ。ゆゑ入て澡浴し。厠ニ出て亦池ニ入て沐浴
ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]

○送葬　同上

同書に云人死られぬ。筐席の類を以て包み。布をもつて是を蓋ふ。毎年葬礼の時ハ。旗幟をもて。鼓樂をたて送る道をぐる米の炒りをを抛撒もとゝ。丈より城外の人烟もれる所よりを死者を引出して共所に棄れぬ。犬鳥のたぐひ群て来て忽ち食ひ尽をを子弟されを見て怪でいらく父兄生死ハ福あるの所ハ此善報を受とゝ。合られぬ悲ていらく。前世の罪滅せるが故此悪報を受とゝ。男子ハかしらの毛髮。女子ハ顧門の髪を剃ゝ。

殘の大切なし。是を以て孝とゝるのみ。

○陣縞　同上

同書に云土人女子を産る時ハ。父母ハ祝ゝて いとく。新りくハ汝将来。千百人の丈夫ハ見あるを要せとゝ。此地の婦人至て多淫ぶんしるるゝ。ゆゑ記せり。富室の女ハ七才より九歳を限て貧家の女ハ十一歳までを限りて。偽て清ゝ。道士をもて童身をもちむ。毎年四月十日を擇みて陣縞の日と定む。陣縞を行ひんと欲する者ハ。皮肉一所ひ出れぬ。此の

上。巨燭ハ刻畫たる紙あるふ。れをとるふ長け燭を
點し。火刻画の如く燃るを陣鍛の時刻と為るなり。彼定日より一二月も前より。女子は父母ハ處
の寺觀をとるあるときて。係結の人を擇ぶ有德の俗
道人ハ大抵官府妓室より先約ありてなりく貧者
なるのもふ及ぶべとなり。粗の市に酒米布帛擯掃
銀器も。（掃掃ハ捨の所紙を蘸醬といひ。又賓門藥錢といふ。味い濃美
なる事なり。なるべしと。）（鍛を治る。熱てはを出ハ。多用なるべし。長崎
木炭ハ栽ふ。五穀組ハ四德紙拳く。碗ハ紙碎ハ紙碎高。儀ハ紙
絶ふ。飽ハ紙磯ハ紙。又東西洋考ハ云。白城
玉出ハ味。掃掃盛紙拾ふ者。茶ハ小多ハ紙と
為れ物を積る。勿論家の豊儉ハ過ひて。美ハ行ふと。美

家あて。此俵物の無しきよりて。女子の十
一歳より及ぶまで。年紙の多ふるまて金銀を掛て
美女の陣鍛を助力とる人あり。是莫大の費ハ
ふるとふ。係結の日ハ親族迎婿を集て大
宴紙設け。黄昏ハ輿ハ轎兼を迎。鼓楽
て俗を迎ふ。方中綵帛を敷ひる床二脚を
設く。一脚ハ主ふ人ハ女紙。在せしめ一脚ハ別俗紙
在せしむ。夫ふ客鼓楽して酒を酌む
うち。巨燭の火刻画の如ハ。れハ俗女と俱ハ房
内入る紙ハ。ふく主を去ふ。実ハ交媾とする

いんど。華人よりとるの紙まきゝれば。そのもと洋よせざるとなり。毎年その名を取て酒よ納父母親族こゝろを額上ふ懸じ。或ハ口づゝ嘗るともいふ。天まきよりのみんとするなりひよ迎来りゝる叫のめくふれよりゝめて信を寺本よ送る。他日女の両親。布帛の類を調ゝ彼信の浮へ行。暗に紙贈ふ。たゞきふわいそハ生涯他へ嫁ゝる事なしとなり。陳談の前まで。女子紙去親の傍よ引ゝ。陳談ゝ後ハ房の外ふ伏志めんの傳よ男子よ接ハゝ志む。嫁娶ハ叫納幣の式ハいとゞもされハ甚簡易なるなり。多くハ女子にして後娶ゝ。陳談の表ハ一巷の中ふ十軒餘も有るゆゑ。信ハ士紙送る人数東行西行よ交錯。敏樂の変。慶ゝして丈ぶるゝ。中良寮ふ。三才圖會ふ載る説ハ遠ゝ。女子生て九歳よいる叫。即信紙請ふ信經を誦じ梵語を化粧紙ゝ。寺考良庵が和漢三才圖會ふ文を引て。こゝの考を挑損ゝめと訓を信ゝ。ハ紙ハ。也ハ名目なれハ。ゝ。挑損し。やゝう考る小説ゝ。其紙を取く額ふ点じ。毋もまき額に貼ゝ。嗅ぐ利市と乃云。此説ハ拙ゝ。ハ涙ゝ小似ゝ。利市ハ暹羅國ふて。婚姻の時乃れゝ。回

もとく事も似たりより。利市と陣錢を混じたる
為なり。（次に記す。是衆西洋紀の説なるべし。）外國竹枝詞の注。東西洋考等に
説いへれも陰結と利市とハ異なりと。

○產婦　同上

同書に云。婦人出產の法あり。熱飯を濡紙にて揉て。陰
戸の内に納。一晝夜おきて除き。拾かくなるべかふ。
產後忽平日のごとく。産上陰門收斂して。産の婦人
も。常の室女のごとしと。周達觀（元の世の人。眞臘風土記を撰者なり。）
かりて是疑ひしが。後彼地に行しに。昨宿せし
一家の婦人。其中子産をなし。次日ハ産所の
嬰兒を抱き。くと傳の婦女と俱に。河水に澡洗する紙
見て。始て產婦の安穩なる紙知る也。さて此
國の婦人ハ多淫なり。產後一夜をへれば。夫
丈と交合す。まして連添ふの丈夫。虛弱なれば。淫慾
を恐るゝ中ら。妻の方より男紙見て。
決絶をなすいるとなり。産婦ハ。
よく產育する。家にて。産婦裏しる
事も亦なし。二三十歳の婦人ハ。唐山より西五十
歳の女子なれ。しとも。

○兄弟交合　同上

同書ニ云東門の裏ニ住せる吉撒人その妹を犯し
しものあり皮肉粘て離れず三月を歴て死しける
となり。吾　邦伊勢の神領にも猥に淫するを
犯せる者かゝる神罰を蒙る事ありと恐るべし

○天獄　同上

同書ニ云争訟の曲直を知りがたきものハ城
中に十二座の石の塔あり。公事人の告人被告を
一人づゝ此塔の中に籠しめ両家の親属に命じて
堤防らしむ。かくて一二日あるひハ三四日の間に
非分あるものハ其身中に瘡癤を生ずるか咳嗽
ら熱病を附あて験とし獲理なの者ハ。
纖ももなかりし。是を以て邪正を判断すとぞ
名づけて天獄といふ。

○熱湯を探る

同書に云人家物を失ふ時まさしく盗みたらん
と思ふ人を吟味するに其実否分明ならざる時
ハ鍋に油を沸し其人をして手を伸て探らしむ。
盗める人ハたちまちに腕膚焦し盗ざる人ハ
皮肉もとのごとくなり。吾　邦の探湯に似たり。

○蛆史　同上

同書に云。此國蛇類甚だ多し。人足を咬て足を腐る。人毒蟲を
紫二ておふ。蛇丈の足を咬て足を腐る。人毒蟲を
ぶべくして。姦丈資財を出して正丈おさめ
バ納得して事なしとなり。此國主より蛇禁ずるなり。

○牛類喰ハず

同書に云。馬ハ去勢くして小し。牛ハ甚多く
生ず。若牛死ずれバ敢て其肉類喰ず。又敢て
皮革を剥ず只其まゝ小屠場に捨る。
いけるが人と與る力を出すが如し。

○華人去臘に逃る

同書に云。去臘國中衣裳類著ずの上米穀求
易く婦女好やすく屋室造り易く器用足易
く買賣為やすきが為に水主の唐人此國
逃る者多しとなり。

○楊枝　同上

隨書に曰。直臘人毎旦澡洗の法を。楊枝類以て
齒類淨免。經文類漬浦して後。まさに澡洒
丈より食類喰ひ類を。楊枝を以て歯を磨
免。又經を漬となり

○婦人智多し　暹羅

東西洋考ニ曰。暹羅ハいめ〳〵（赤土）ヶ洲ノ剎地
といひし地なり。暹羅船ハ時々来りて長崎ニ来れバ。此国の
婦人ハ志量男子ふさ〳〵る故ニ公の政事より自余
のるにいるゝこと。悉く婦に計る。其裁決ハ強
とゝ。婦人ハ唐の華人をそれバ。ゑを
ハ置酒て款接し。留宿せしめて狎む
つゞ。夫も禁ずるなし。竹枝詞ニ
女兒斷事男兒聽　偏愛華人夜々嬌
と詠ぜり。同書の注ニ云。華人を愛する婦人の
ゆゑとよ丈。いさゝか如ようけど。吾書美なるが故り

中國の人も喜愛するとゝ人ゝ〳〵ゝるとゝ。

○陽物ハ七寶ハ餝

五雜俎ニ曰。おゝひ國竹枝詞の注ニ云。男子年二十歳
の時。陽物を割て金銀珠玉ハ粒を入るゝ。行ハ鏗然と
して対ゞ。さゝ象嵌ニ入るとゝ。又三才圖會ニ云。男子幼より
陽物を割て八宝ハ嵌し。ぶく富貴ニ衒ふ。
二ハいさゝか異同あり。中良巣ニ曰。南亞墨利加洲
中の孛露國ハ人珎寶ハ餝て面ニ小嵌ハ表裡

の法なり。

○鳥葬　同上

東西洋考に云。貴人死れば乘物にて灌し。高埠に葬し塔を建蓋をかぶせ。貧家は鳥葬す。竹枝詞の注に云。人死れば戸を將て海邊に置。犬・狗・鷲のゆくにまかせて食おはす。其骸骨はことごとく海中に棄。されば鳥葬といふと云るなり。

○暹羅國の婚禮　同上

同書に云婚礼の体は。まづ巫師に踏傷婚礼述て女家に至り侍女の紅紙をくゝり。婚礼彩に點ずるを以て吉祥とす云。竹枝詞の注に云。侍女の喜紅紙詩て男の家に點ず。されを合づけて利市とす云。上の法といふて遠へ。

○聖鉄　同上

此國の人性勁悍にして水戰に巧。將人の腦骨をかつぎ身に纏を名号て聖鉄といふ。刀矢も入ざるなり。星槎勝覽に曰。檳榔の木を割く標鎗を作り。水牛皮にて開を作るとく。

標鈴ハ此近國。真臘古城ともいふ。中良嘗て聞う。暹羅より海を
暹羅人蛮船華船よりも物産を多く運ぶ。
こゝよりあるべしとて。爺を指て海底に埋
和蘭船渡る。其性の猛猛なること。
水牛の熟ハしるハ。是にもつて知べし。
右古城直ハ臘暹羅の三國ハ応帝亞の属国よ
りく古中華へ入貢せし地なり。北方唐土
の西小海を。花蓮的印等よ。西洋より東洋へ
なり。ハレンテイヒハ昂記者の
名成書日とも。
いへども。さまでの珍説を得られハ。さぐく
華人の説。二説拾ひて。竜涎の香り
呈する而已。

萬國新話卷之三 亜細亞海嶌之部

東都　森嶋中良　編輯

○凡哇紀傳

凡哇國の都を「パデイヤクラン」とゝふ。國王一日筵席を設して。大に雜劇戯なさしむ。これを殿の外に人の竜子盤桓す。忽管弦の音絶て。甚場よりあ足一人進出て。守門の長叱して曰彼度

汝めき少年者の注屋に有るあるぞと。眼を
走らして眺めしに。彼童子ことごとくせぬ微咲
ていよ〳〵。汝等いうやゝ如ゆるとる。我踏越ても
彼所よ到るべしと。傾て殿の門へ入ときて。元来
此童子の父ハ鍛工の長にて。此家ふ居合せるが。
此体を見るより。走り寄て引留め或ハ叱り
或ハ宥めて留めんとすれども。つゝもなへぬ振
放して殿門ふ跑入り。彼新劇の場へ行んとも
しが。ものゝ不案内のゆゑに誤て道を
違へ。後宮の方へ行て。堂上ふ一つの器

器を飾置り。名を「ハ」サ至」と云ふ。此制度つ夏ゆ
此至ふ国中の重器なりて。国王のみハ
みぶりよ飾ぶ事ゆゑ。此ゆゑ拙者ハ
彼此童子ゆと齊き堂上よ昇り。打命
傍りよ人なりしバ。思ひの作ゆゑ。既再し
ける。時よ國王ハ新劇を見て大よ樂ぶ極る
不。たちまち彼樂器の為ぶて大よ驚き。
何者ぞ我を置ぶ恐よ驚ぶやして。急ふ人
を遣ハ走て是ぶ捕へ走む。官人等うけなり
後堂よ乱入。我儕よ彼童ぶ捕へんとて。童子ハ

騒ぎて力を振て友人を拒りけれど。大勢の友人に云甲斐もなく追立られ。後を見せて逃散りけり。国王其の様を見るに。何れも頭面手足に重傷を帯するありて。王も舟にて宮中の長官に問て曰彼童ハ何等の者なるにして。かゝる勇猛の働をなすやと「マントリス」長官の名謹んで。彼ハ鍛工長の子なりとぞ答ける國王廢王に命じて鍛工長を召出し。汝が息むしろ小弱りけれバ。彼小友者ハ微臣が子「立レグワナラ」と申ものなりと答ふ。国王曰我

こふ子細あれバ。汝速に彼小童を連来るべしとありけれバ。鍛工長かしこまりて御前を立帰りて「ワナラ」を召連来れり。「ワナラ」ハおめるもなく。国王の御前に到りくと座り出。恐れ気もなくこれし居ける其の時國王問ていはく。彼ハ実に汝が子なりや。鍛工長答ていはく実に臣が子なりと伝ふなり。國王又曰けれど汝ハいかに妻を娶りしまさに近ごろ一人の妾を召抱へたりけれども。其日数猶僅なり。然るに斯る男子

有て。走らるかゝる振舞に成ぬるこそ。
とあり。われば。鍛工長叩頭して宮中
けるに。誠に彼小友者ハ。新族の子孫者取て。
臣ゝ子ともに。仕ふなりと。國王曰。走らるバ
汝ゝ子。かゝのめく長大ゆして走らも強
勇ゆ。今日より我宮中ゆ居て召仕ふ
べしとて。やがて「ワナヒ」を堂上ゆ召
れける。鍛工も内ゆハ憂を抱いでも。外
ゆハ歓表の色ゆ成ぬ。恩を忘して退
出て。此段所々綴あるへし。若編を
國やさしり五洋ちゝも

王ゆ近侍ちるゆ僅に一二月。甚ゆ近侍
の國に合戦ありけるゆ。やがて收凡陸國ゆ
繋ひるゆけれバ。国王「ワナヒ」を軍持ゆ
て。戦場ゆ向ハしむ。「ワナヒ」戦ハバ必ち勝。攻
れバ必拔て。敵兵ゆ追ゆ。ゆ。許多
の州縣を攻取。数多の賊宝を分ち。凱
陣ちれバ。國王大ゆ好び是ちして彼
を寵ちるの余日十陪せり。遂ゆ「ワナ
ヒ」ゆして万人を統る長ちして。「パテ
イヤヤラヒ」都の名の内「パワセル」地名の北の側ゆ居

任せ〜む。其権勢。此國の執政「アリヤバレヤク」人名あるおとゝ〜ざりけり此「アリヤバレヤク」なる者ハ瓜哇国の諸臣多き中にも取りけ貴重せらゝ子細ハえまず國王の子なれ。廣王の列なれど。今群臣の長として執政第一の人なるゆゑ「ハンヤク」久しく封を辞まして都に遠ざかり。國中の政令をとるゝ。或日國王の御前ゆ出。願くハ國中の微エをことゝく我宅ゆ呼集ち。一ツの軍器を製せんと欲すと

請ふ。父の國王許容ありられバ。「バンヤク」まづ國中の鍛工を呼集め。軍器あハ〜ずして一の鉄室を造〜むとも一日の内ゆ功を成んすを要す。是何かゆ軍器をハ制せざるして。此室ハ造るとき。「バンヤク」久しく不臣のこゝを懐き。父國王を弑して。おのれ「パテイヤヤラ」の國王〜〜と欲そるきざしあり。故ゆ機密の謀を設けてこの室を営むなり。〜〜外人の浅はかなる此歴ゞ。おのゞ〜昨日此室ゆ誘はれて。一日の中

ゐハ成就せしめるあぞ有けり。既ゐ其室成
けれバ。「ヨンヤク」種々の珍宝を挑列し。牀
帳枕机の類。金銀珠玉を以て飾り立。
その上名香数品を具して。一室ゐ薫じ
満らしけれバ。一たび此室ゑ入るものハ恰天堂
ゑ坐するごとひをゑめりける。「バンヤク」こゝ
ゑ於ゐ彼り彼り。國王を我宅ゑ招待せんゑ
を請ふ。王即時ゑ駕を以て。彼宅ゑ至
きバ。「バンヤク」禁行を指て出迎ひ大ふ宴
を挑て。山海の珍味を盡しけるあぞ。王も

そしめ陪從の諸臣。各歓笑を極り
時。國王偶座上の新室を見て。「バンヤク」ゑ問
て曰。彼室ハ何の故ゑ造るゝ哉と。「バンヤク」
答て曰。彼室ハ比丘の寢室ゑ造るゝ而ゐ
て。暑き時彼室ゑ入バ自ゐ暖を生ず。冷
きものハ自然。飢渇。飢渇
きものハ自然。飢渇。飢渇
奇なり。我暫く入て試んとて。即彼室ゑ
入りれバ。「バンヤク」計もぞゑ成を大ゑ怒び。
手早ゑ彼室の戸を閉ぢ。鉄室の四面ゑ薪

を積て山のごとくなりて。一同に火を放てれハ。猛烈天に聳えて燃上る。陪從の諸臣大ハ驚といへども。悉く「バンヤク」が猛威に恐れ。誰有て火中に跑入り。王を救ふものの一人もなかりける。良ありて國王燔肉のごとく焼死しける所に。「バンヤク」麦を励まし。いていつて曰。凡人たる者。いさらの債といへども。借ることのハ必ず返さるといふ事なし。我幼き時父國王のたふ「カラハンゲ」河の名のあ中に投入られたり。此事前編に出たり詳なり

今その債我償ふとて遂に其屍を。「カラハンゲ」に投入れむ。陪從の臣下おのおの中に。「ランガンダガ」といふる者。此席を恐び出。太子「スースールーピ」の宮に来り。大に號泣して事の扶を告。太子大に驚嘆して「バンヤク」が宅へ馳向ひに。その兵士我程にして。たちまち宮中を囲ひ國中の老ひたる悪く「バンヤク」が威に於て麁き浸ひられぐ。太子の兵卒戰ふ毎に敗北。四五日ろ程の戰ひに。近臣のこゝを討死し。太子一人とぞなりぬ。今ハこゝを引退く

所より東方より道をこれ伝ひ行くも只一人千磨百経を凌ぎて。やうやく「カリグレテイン゛ゲ」といふる縣よりこゝへ逃げ出りし。爰に一人の老婆あり。名は「ミヤイランダカリグレテイン゛ゲ」といふ。素これ國王の妾なりて。太子「スーストルーゲ」は産まる後人に嫁し。此所に住居をかせり。太子先此老婆の方は休め。仇復讐のるは易るのこと。肝膽をこゝに砕きりう。扨も「アリヤバレヤク」は父國王は弑して後。「パテイヤヤラ」に居住して自ら哇國王と称するに。人敢て反く者なし。此はきをふ今は「ゲ」なれ。太子「スーストルーゲ」を偶宿せしめ。あるひは法を以て扶助し。合力をなすものあるは。罪を九族に加へ。しかして。太子を探し求むるに甚厳密なり。「ミヤイランダカリグレテイン゛ゲ」或日用事ありて。「パテイヤヤラ」の都に出しが。此制札を見て一驚は吃し。慌々忙々家に帰り。太子に向かひ。「キヤイラサリイ」「キヤイバアデル」「キヤイタムビ」

等と高後して。左子は逃れ去ぬんとするを
留るゆゑ。「スースルーゴ」人そよ向ひて曰。今我
たとひ鎖骨銅皮あるとも。一掬の人夫は
「アリヤバヒヤク」が大軍か敵せんとおもひ
ぞ。終は避て他邦よ赴き。此の至るを待べ
しとて。即時よ山地を去んとせ。四人の者
頻よ別れ惜みて。皆く左子は棄るよ悲
ひぞ。彼是百人ばかりの人を従へて左子ふ
附添ひ。何度は海岸を云るもなく。そこ
うこそ落行りる。かくて数日は歩行よ。彩

らして「クームバンゴ」といふる山の麓よ着ぬ。
人々此山よ登んとするよ。路くるふる嶮岨
なれば木の根よ縋付岩頂よ縋りて漸よ
攀躋する所よ。たちまち一陣の大風起り雨
ハ盆は覆るがごとく。木を拔石は飛しつ。電
光霹靂ひびき渡り。山嶽も碎飛。天も破
るばかり。是何の故なれば此山上よ一
人の妖婦あり。名を「ニヤイテヤンマラトウンガ」と
いふ。天下の妖怪悪鬼の類を統従へて。此山中よ
住れ住ること年久し。今此風雨雷電ハ衆の

妖怪等。「スースールーゲ」以下の人々。此山より入る。彼妖婦より告知らんとて呼喚る。雷雨。人々肝魂飛て忙然たり。甚打うち。何処とも知らず一聲の振鈴の音響くと共に。忽雷鳴快晴せり。丈夫人を義励ます。山の坂より到りて見れば「テヤンマヒ」の大木。木名形状未詳森々として生繁り。不思議や其樹の蔭より。美陰の多を奉て一行の人大よ疲れ怪みけり。太子おりへらく予期てやうやく此山中より「ミヤイテヤンマヒトウンガル」と

いふ仙女ありて我が此木にて甚仙女の隠れ居るなんと自言自語る所より。思ひもよらぬ彼木にて大光明放て根の釘線を孔しに到るなり。白髪の僊女現れ出り。太子驚へ地上より跪て曰。大仙我「スースールーゲ」道士の為に困厄して此所より来れり。願くハ教て無しと。仙女曰。若我汝が来る所を「ア」一叶の勢より乗して威権甚猛なり。更に汝が為べき所なし。我も亦汝救ふ能ハず。

得ぞ。然るとても後来の苦難を示すべし。爲み某れ詳なる是を知るべし。汝今此山を去り。物を語を乗よ而りて後行せよ。彼の数日あり。一株のポーンマテイヤと名なる木を見るべし。木の名形状未詳甚実に食べ味ひ苦からべし。甚樹ある不よ都を建べし。百神擁護の地なれ。父國王の讐を敵ぞるのみなるぞ。子々孫々に至るを永久よ瓜哇國の王位を保つべし。物且も忘れ来れ我前過の物を語ん。我は元来汝の

大叔母なりて。汝の弟祖父「ムーデインゲサリ」の女なり。我若かりし時。瓜哇國中の諸侯容貌の美麗なる我を欲し。各あらそひて妻んと欲し。妻問なるを未きるれども密よ一千人の女子と相約りて。敢て衆人の妻問を受けざるを依りて。衆諸侯怒を動し。遂よ干戈にわかに合戦利なくして。雙親難を逃た母へ了。我は其時より此山に移り住し。年を積月を累て。こゝに世の者となれ

[illegible]と。語り終りながらまよく。こちまち立ち離れて
老女の形に変じて。悼約なる美婦人となる
きり。其容姿実に絶代無双にして。嬌氣
人を迫きり左子其体精神恍惚として正
気なく。都て前後の弁ぜず。一意に其
美貌に[illegible]りて抱擁し。手に[illegible]て
戯れ[illegible]。忽然として又[illegible]めの形となれ
る。左子心始めて省悟し。大に愧大に愁地に
伏して罪に謝す。仙女曰。あえて怪しむなかれ
吾。もとより此身人の友りる道に棲人なれども或ハ

老ら姿に現じ[illegible]ハ稚き者ともに変じ男
となり女となるなり。[illegible]に長に
死なるのなり。変化不測の術に[illegible]。
ハ是より南海「ブランデビ」という山の南。「マウ
タ戸」に都に築き。万國世界にあるゆる所の
妖怪悪鬼の首領となり。大事を決し。
大軍に出でん時。汝必ず我名を呼ぐ。呼に
応じて守護ぶべし。[illegible]此地を発足
せよと。未然に教諭なるの掌に指ざ
「スースールーグ」をしめとして一行の衆人。

こゝ〳〵拜伏し。是仙女の令ふ。ものゝべ。東の方より路ありもあり。仙女の教ふる所なり。疲れ休み。是教ふる所行よ。「スースルーゞ」疲難て。一株の木下より憩息ものゝ。地上より二三箇の菓実あり。是ものゝ。甚熟し。採て食へば。甚味ひ至て苦し。此より於て彼仙女の言ふ所を思ひ合せ。叔父「ウイラサリイ」より問けるハ。是ハ何の菓ぞ。此地ハ誰が領地ぞと「ウイラサリイ」答て曰。此菓ハ「マデイヤ」と云へり。此地ハ「アステイヤ」と云て。則「パデ

イヤゼラ」の屬縣なり。汝が領ずべき所なれども。「アリヤバヒヤ」「パデイヤゼラ」ハ押ても。「アリヤバヒヤ」ハ賊臣の領ずる所なり。「スースルーゞ」此言ふ所聞て。天より歓び地より喜びていへり。幸なるかな。是ものゝ。叔母の教ふる所なり。地なり。速ふ都ハ建べしとて。やがて地名ハ「マデイヤパイ」と改め。遂より此所より都城を築き。近邊の人民を募集ひ。前國王の旧恩ハ荷ふる者なり。ハもくと

馳集る程なく。幾ばくもなくして数千の軍兵なりけり。いでや此旨を傳じて。逆臣系統一戦まいらせんと。合戦の評儀まちまちなり。去程に「ヒングワナヒ」ハ「アリヤバレヤヒ」國王を弑し奉りしかば。己が領内「ハツセヒ」の地に在て。道路を隔てひ多勢。此大変に驚き怒りし。其後逆臣「アリヤバレヤヒ」が逆意の以来。古子も行方知らず。其怒り骨髄に徹す。

今ハ又「ワナヒ」が頼むべき君も古子もましまさず。此上ハ「パデイヤヤラヒ」の都へ攻入。逆臣「バレヤヒ」を討べし。将従ふ如系統一々ふ討べし。忽に曠野となして。今の怨念を散ずべしと。たぐひなき王下の軍兵の勢川卒し。不日に都へ攻上り。震食を忘れ息休も絶ず。日々夜々に血戦して屢勝利を得ること。寡小敵小なれども。窮鼠猫を噛むごとく。大國の軍兵なれば。切ても突ても尽ることなく。中〳〵一時に取挫きがたく。

脚肝を摧きしが。此頃太子「スースール
ー」に「マデイヤパイト」より都を建。四月の
末に招くと雖も。取扱もこれあるべ
昂味より馳参じ。「スースールーグ」より謁見
しられば。太子一度は悦み。一度は辱び。
ものいら「ワナラ」より三千の兵を揚げて
「パデイヤマラ」より進発せしむ。「バンヤク」
妖中に出よりも。逞兵をもぐつて迎へ
戦ふ。合戦数廻して義兵遂に傷
利を失ひ。敵兵に鑿れし。大将「バンヤク」

を擒とし一刀の下に命を殺ひけり。此に於
て。「スースールーグ」他日の鬱懐一時に啓け。父
國王の神霊に慰られるを得ざるを
して後。其年八月「マデイヤパイト」より都城
を移して。爪哇國王と称せられ「パデイヤマラ
に出ば。其子「パンゲランアリヤパヌーラル」とあ
て是を治めしむ。三人の叔父に執政と
し「ワナラ」より扶ふ大臣を以て其年の
官職盡く備りて。爪哇國全く平均し。
新國王の徳化より麗き徒ひけり。其後年

を歴て。「スースールーゞ」病に係りて神去りれば。其子「パラプーアノムロツリングパスサル」是に嗣で瓜哇國王と称せられけるとぞ。

此一條は「バターヒヤス」人ノードシカップ」と云る書中（瓜哇要録と云義なり）「ヤワーンセヒストリ」と云る條紙。戸が支良庵前野達が譯しる。「ヤワーンセヒストリ」は瓜哇紀傳と云る義なり。其總目は覽て其第三條にて。其一二の條は脱せり。故に起出の来歴は詳にせざるなり。

○竹鎗會　瓜哇

方輿勝覽。おもひ外國竹枝詞の注に云。此國十月を春首とす。竹鎗の會といふる有り。夫婦塔車に乗して會所に至り。夫婦偶を立て各竹鎗を執。妻は三人ごとの末棍を執て其中に立て。敵を呼て號とす。鎗は夫由りて。其時二人の妻。彼末棍をもりてこれを防て。那

刺那刺しらよ。昂らのまゝ。めて退散
ら。若突叛ら者あるハ。國王ら
獄ら者よ余して。金錢一箇ハ死者の
家よあゝ。死しら者の妻ハ獄
ら者よ隨て去ら。王も妃しを
もよ。車小乘て會所ゑ出らを。

○聖水 同上

此國の海灘よ小き池有。聖水ら名付。元
の將。高興史弼。此國ハ征ら時水ゑ之
しら。天ハ雨ら祈して禱祝し。錢ハ

地上よ突立ら。泉湧て涌出せしを。
我朝壺井の清水と同日の談なり。

○巴旦人日本へ漂着の始末

巴旦ハ大寃の南に當りて。天竺ゑ近き嶋
なり。延宝八年五月十七日の夜。日向ハ國へ
十八人家の異國船漂着ら。夫より
四月十八日。於王伊茂生雲寺殿ら。濟場
へ送ら。幻鎮臺牛必忠左衛門殿のくら
らゝ。て十石寺御菜園の門。唐造の船
具ハ入置。武間源ゑ六名ハ小家のうらへ

紙漂宮紙兵庫書。扨亀紅毛の沢山を
こじ免。あく〳〵事を舌人に命ぜられて、問
せらるれど。些も云語通ぜざる故。行田の
人々も知ざりしう所茅根苗手入没水野
小田原つたなる。女芝ある男みて。手多
盥小多紙漉へ。小石を以て嶋紙を拓し。笹の
葉の舟に土偶人紙を乗せ。水に浮べ見せられ
ど。漂客ども合点して。拓て嶋紙を作る習
けるが。まこと〳〵方位を正し。日月星辰の
形紙作りて昼夜沈没ち。野も船路を行

りれば。異國人つぎ〳〵ふ仕方かしりて。逐
一地圖ふ燭し見て。巴旦人なるものを発る
し。結量へ訳と告しりれば。牛迎氏大ふ
感ぶ有りて。ふたゝつを巴旦人に定めら
生れり。漂流の巴旦人。姓名左のかし。

ヌマチイ　二十五六歳程
スイモンクイナムアワク　三十一二歳程 疫死
スイモンマツトバク　三十四五歳程 日射
シタヨムナツク　二十歳程
マトツポ　五十七八歳程 病死

スイモレカラム　二十二三歳程　病死
スイホウ　五十七八歳程　日ノ
シヤウロタツコ　十五六歳程　日ノ
子ヤス　二十四五歳程　月ノ
スイモレトツク　三十二三歳程
ケムライナツク　三十二三歳程　病死
ラツクウ　四十四五歳程　月ノ
スイモレカツヤ　三十七八歳程
ヒハクランナツク　四十四五歳程　病死
スイモレアウ　三十一二歳程　月ノ

セイダイアツク　二十二三歳程
スイモンムスリ　二十二三歳程
スイモレカラムナツク　三十二三歳程　病死

右十八人の肉色黄白なる有。黑きあり。肉ハ赤なれども。刹髮赤きもあり。背の高サ五尺五六寸。衣刹せられども。長髮にして。

中良案ずるに是ハ天竺あるいハ西洋の人にて

以後の日本の風俗の如し。冷氣の物よろこべば。木綿布子ハあるべし。

中良案ずるに是ハ天竺あるいハ西洋の人にて

へられ申べ。殘らず強ハ技を。袖長の襦袢八幅七寸斗の

巴旦人之圖

耳より引ぬかれハ立山の廳へ
そゞめて呼出されるる外
切戸口ハ
入口一ツ

十八まてのの紋字ハ
書ゝるを耳無へ引
さて仏書の巴旦人
と呼て支を矢ぜ
られしまん仏

きゝ耳珠ハ環ハ
入る完ゝ
ゝ

木綿あて。織目よまぎれひ糸にて縫ふの掛物
あり。唐山製の刀剣佩。煙草煙管八日本語
と同し。文字有。横小書也。中良案ずるに天竺にて用ゆるヨレイ巳文字なるべし
情度ずるに蜀黍の稈紙六月前。九月より至
まぶ乾て喰ふ。仮北樊法日本と かくるの
ごし。但し土鍋あて炊なり。結髪の命
わかりて。死しるを太をあくるれば。そう
焼あして小刀あて切り。水煮あして食ひ
なと。菓子などあるゆまで。人数より切り配
て合ふ。或時ハ大木の枝へ。細縄あて器紙を。

者紙を丸て毛を引。ふ煮あして食ふ。木
に登りてハ猫のあくく海より入てハ鮫のかし。
長サ二尺五六寸。横を尺ばかりなる
刻物の箱を壁より立て。永紙を貼て賭る。
毎年九月の比ふいりて立て湯
浴。九月の比ふいりて立て湯
紙用ざりしと。巴旦人ども返を脇死
し。行きて崇福寺へ葬る。残る六人ハ
墨紅毛人を石出し。此者ハ本國へ送て
をいたし。迎ふ使さる。蛮人畏りしるを
ゆて。同年九月出船の節同船して出帆

志ける。巴旦くも本國へハ帰らざるして。
咬嚼吧（ジヤカタ）（爪哇の都なり）にて（刀えパアルハ）妻（ツマ）（ヒ）具し。一人ハ泥水匠
となり。孫ハ治者の加工となりて居る。
爭の加比丹言上セしとぞ。巴旦人の答
ハ船ハ代銀百目ハ拂ふなり。長（ナガ）六間
横ハ丈五寸。茂みてあり。後行ハ不
小ハ（ハ）（ハ）（ハ）牆長（カキ）ハ丈八尺三寸余あり。
となり。此事西川氏の長崎夜話。及び
華夷通商考より系（カケ）場（ハ）紙（ガミ）に記ス。
ハ大槻玄澤子より右の回紀ハ
かいまゝの甚漏なるを説。詳説ハ予が手輯
なる所の海外異聞中に収めり。

○老者を殺ス　巴旦

曰ハく。年老るものハ働悪しく役に立ず
して。親ハ子に殺して仕ふ。故に家道
優隆芋料を多く貯へ家内ハ
情なるに成ぬ。老者ハ養ふものも有と
なり。此國五穀ハ絶なく。とりわけ芋を
りて糧とす。素より仏神を尊
ばず。婚葬祭の礼もなく。人死

それハ畑のかくゝ埋免。其孫を踏平し
畝となん。

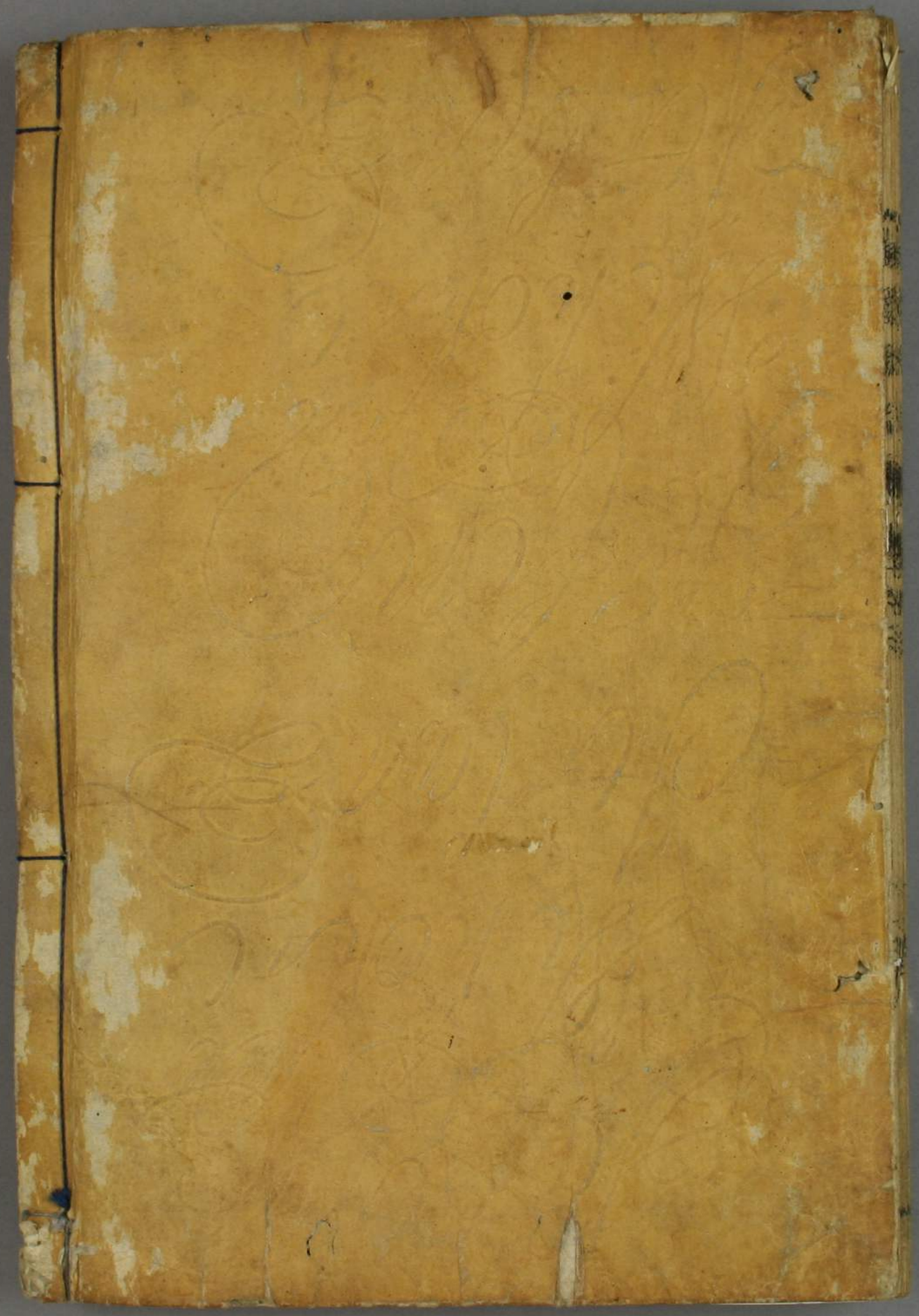
右の話ハ寛文八年尾州智多郡大野
村なり。孫右衛門といふ者の形巴且ふ
漂着し。移りの艱難よ逢りんが幸
うして彼嶋を逃て出。南京人よ
扶助せられて日本へ帰りる水主
どもの話なり。其記録ハ海外異聞
中小載り。

○甲冑 同上

彼水主ども巴丹より漂流の写。彼國中「マナニ
ヨイ」といふ所と「ウサ」といふ所と仇を結び
て軍を起しける。鎧ハ牛皮あて作る。冑ハ木
を刳て鉢子ハ如く製しるこの絵巻
しとぞ。

○家作 同上

家ハ大抵九尺四方よ二間なり。形のごとハ
三尺程よ作り。四隅よ柱立へて是海
風防きとなりて有り。客来迎ども内

へハ入レぞ。各門ニハ石あり。其石へ獨樹を
さも。扨さまざまニハ數待ともん。為て家作
に釘を用ゐぬぞ。樹の皮を拾ひ立屋上ハ
何迄も茅葺なり。根太ハ木紙なりぐるる
作ゆく麦物もなし。金神地玉ゆゑ。
極寒中も。日本の三月位の気候ゆゑ。
寒ふなくして。國人多くハ裸なりとを。

筑前国南九州場邑
小長井氏
所義